

ジヤステイスの力を失った後、私は野盗に襲われてしまった
以前のような力は無くなり為す術もなく捕まってしまう……

「……」

……



「やっと思が覚めたみたいだな」
「お前たちはっ…!?!」

目の前には私を襲った野盗たちが佇んでいた
とっさに体を動かさそうとするが
体が拘束され動くことができなかった

はっ!?!

くっ…こんな奴らに捕まってしまうとは…
まさか帝国の者たちが私に気づいて捕まえに…!?!
っい、脳裏に嫌な考えがよぎってしまう…

「それにしては上物のメスドララフが手に入った」
値踏みするかのような視線が私に突き刺さる



メッアアアッ

その視線が私の胸に集まっていることに気づき
自分の胸を確認すると裸であることに気がついた

「……!」

その瞬間、顔が焼けるように熱くなった

「みつ…見るなっ!」
「おっ…!!いい反応するじゃねえか」

胸を見られた恥ずかしさから、つい取り乱してしまおう
男たちはその様子を愉快そうに眺め嘲笑った

ズルッ

（こんな辱めを受けるなんてっ…!?)

体を拘束されているせいで
男たちの視線から逃げることもできない

真っ赤になった顔を背け
恥辱に耐えることしか今の私にはできなかつた

「そろそろ頃合いだな…」
私の目の前に空のジョツキが一つ置かれた

「いっ…いっ…たい何を？」
「すぐに分かるさ」



目の前に立つ野盗のリーダーと思しき男…
その表情はまるで新しいおもちゃを手にした時の子供のようで
その姿には見覚えがあつた…

珍しい骨董品を手にした時の鑑定士だ

私は今、こういったらの戦利品として
値踏みされているのだと理解してしまつた…

「くっ……!」

男の手がこちらに伸びてきて私の胸を鷲掴みにした

「おお、さすががマスドラフいい乳してやがる」
「さっ…触るなっ!」



なんの抵抗もできず乱暴に胸をこねくり回されてしまう

「くっ…好き勝手を弄ばれるなんてっ!」

今は胸が力任せに押しつぶされる痛みと
苦しさに耐えることしかできないでいた…

男に胸を揉まれてからというものの、
どんどん胸が苦しくなっていく一方だった…
最初は力任せに胸を鷲掴みにされるので痛みがあったが、
今は苦しさが勝ってしまっている…

「こんなことをして…一体何をっ…!」

モみ

「へっ…そろそろデカ乳を弄られて
気持ちよくなっちゃったか?」
「きっ…気持ちいいだっ!」
苦しさを余裕が無くなってきたのか
語気が強くなってしまう

モみ

「ふざけるなっ…!こんなことっ…くっ…苦しただけだ!
今すぐその手を離れたらどうだっ!」

「へえ…苦しいねえ…」

そう呟くと男が一瞬不敵に笑ったような気がした…

私の要求は虚しく聞き流され
男の胸を揉む行為はさらに続いていった…

「っ…はっ…んっ…！」

なんだ？なんでこんなに苦しい…？
今にも胸が張り裂けてしまいそうだ…

心なしに揉まれている胸が固くなってきたりする…
一体…私の胸はどうなっているのだ？
ジンジンと乳首が痺れ感覚が麻痺してくる…

今までに感じたことのない
体の違和感に不安が募っていくばかりだった



「はあっ…はあっ…はあっ…」

長い間、男に胸を揉みしだかてしまった

男の手から胸が開放されると
垂れ下がった胸がいつもより重く感じた



たろん

（胸が張って苦しい…今にも張り裂けそう…
どうやったら…この苦しさを開放されるの…？）

胸を揉まれることにより溜まっていった苦しさ…
男の手から開放されたというのに今はこの苦しさを
開放される術しか考えることができなくなっていた…

「胸を揉まれて浮かかない顔だな？
俺の愛撫は気持ちよくなかったか？」

「そんなわけ…ないでしょ…！」
余裕がなくなっているのか
明らかかな男の挑発に声を荒げてしまう…

キッ

「おつと…ご機嫌斜めみたいだな…気持ちいい…
というより苦しくて仕方ないって感じかあ？」

「お？」

「瞬、心を見透かされたような気がして焦ってしまった

「くっ…一体何をしたのっ?」

「へへっ…それじゃあ今から何をしたのか教えてやるよっ
っらでっその苦しさから開放される方法もなあ」



男は愉しそうに私を見下ろしてくる
まるでこれからが本番であるといわんばかりだ…

だがそんなことはどうでもよかった…
苦しさから開放される…
その一言に私は内心喜んでしまっていたのだっ

男の手が再び私の胸に近づけられる

また鷲掴みにされると思い身構えたが
男の手は胸の下へと動いき
私の乳首を指で軽く弾いてみせた

「ひいっ!!!」

その瞬間まるで体を電撃が貫いたような衝撃が走った

軽く乳首を弾かれただけなのに体は仰け反り
ガクガクと震えて力が入らなくなってしまう



カリ
クッ

あ
い
ま

ガ
クッ

「なっ…なにをっ…?…?…?…?」

あまりの出来事に我を失いそうになる
思考が働かない頭を使い
必死に状況を整理しようとした…

「へへっ…いい反応だ…
だいぶ乳首も敏感になってるじゃねえか」

男はそう言うと私の目の前に
乳首を弾いた指を近づけてきた



「なっ…えっ?…しろい…液体?」

男の指には白い液体が付着していた

「こいつは母乳だ」

「えっ?」

突然の男の言葉にますます混乱してしまおう

(母乳…なんで…?まさか…私の胸から?)

え?でも…私の胸から母乳なんてでない…)



「なんだかよくわからねえって顔だな…」

「くくっ…お前が気絶している間に
母乳がでるようになる特殊な薬を
使わせてもらったってことさ」

「そ…そんな…」

私の知らない間にそのような薬が使われていたなんて…

あまりのできごとによりシヨックを受けるが
これで納得がいったことがある…
胸が張って苦しいのは母乳が造られ
胸に溜まっているからだっただけだ



(母乳をだせば…この苦しみから開放される…)

胸が張った苦しさから、ついそんなことを考えてしまう

母乳を出すということは自らの乳を

搾ってもらわなければいけない…

つまり、男に乳首を握られる…

くっ…触れられたただけであんなになっ…
てしまった…
私は耐えられるのか…

まだ触れられた感覚が残るほど敏感になった乳首…
それを刺激され正気でいられる自身は今の私にはなかった



「胸が張って苦しいんだらう？
今すぐ搾れば楽になるぜ…」

「っ…!!」

考えていることを言い当てられて、
男に心の中を見透かされたような気がして焦ってしまっ

「私のおっぱいからミルクを搾り取ってくださいいっ
くらい言えたらそのデカ乳からミルクを搾ってやるぜ」

「なっ…!!そんな戯言、誰が言うものか!」



人を小馬鹿にしたようなセリフに唇を噛みしめる

胸が張って苦しいのは事実だ…
できれば今すぐに母乳を出して
楽になってしまいたかった…

(だがそんなセリフ…口が裂けても言えるものか…)

わずかに残ったプライドで
なんとか踏みとどまることができた

その一線だけは越えてはならない気がしたのだ…



「この程度のセリフ
言えるようになって欲しかったが…しようがねえ…」

「くっ…」
今は男を睨み返すことしかできない自分が情けない…
どんなに胸が苦しくなろうと我慢してみせる
そう決意した時だった…

「初回はサーピスだ」
そう男が呟いた



男の手がまるで牛の乳を搾るかのように
私の乳輪を指で締め付けてきた

「ひゅっ！」

反射的に体が反り返ってしまおう

胸が圧迫されパンパンに腫れ上がる
でっ…ぐるじいっ…!

「今からその体になっぷり
搾乳の気持ちよさってやつを叩き込んでやる」



男の手が無慈悲に下へと引き搾られる

「おおおおおっ♡♡」

乳首を握り込まれた瞬間、私の意識は飛びかけた…

今までに出したことの無い獣のような
うめき声を上げ体が跳ね上がった



「おっと…初絞りは出が悪かったな…」
男が再び母乳を搾り出すため両手に力を入れた

「あっ…ああ♡あ…♡」
胸を圧迫され自分でもよくわからない
うめき声を漏らしてしまう

再び乳を搾るのを止めようとしたのか…
もう一度搾乳して欲しいと懇願したのか…

もう頭の中がグチャグチャで
自分で自分がわからなくなってしまった



「んほおおおおつ♡♡♡♡♡♡♡♡」

二度目の搾乳

さき程とは比べ物にならないくらい量の
母乳が吹き出し空のジヨツキを満たしていった

(きゅっ…ぎもぢいっ…♡♡♡)

搾乳の瞬間、一気に体中を快感が駆け巡った

胸を圧迫していた苦しみが全て快感へと変わっていく
今までに味わったほどのない快楽に脳が蕩けそうになる

ガク

ガク

「あっ…♡あひっ♡♡」
「へっ…すげー量と勢いだ…
それじゃあさっそく味見といこうか…」

そう言うと男はミルクで溢れたジヨツキを
手に取り一気に飲み干していった

「ぶはっ…うめえ、合格だ！」
「っ…♡♡」

その光景を見た瞬間、体の奥が熱くなってしまう
男に母乳を飲まれ体が悦んでしまっていたのだ…

「うそっ♡私の体おかしいっ…♡♡
へ、変になっちゃうっ…♡♡」





「はっ…♡はっ…♡はっ…♡はっ…♡」
乱れた呼吸を必死に整えようとする

まだ搾乳の快感が体に残りふわふわと
まるで体が宙に浮いているようだった…

「そういうえば言っつてなかったが…
この薬は魔力を変換して母乳を造る仕組みになってるんだ」
ミルクを飲み干し、満足した様子の男は
まるでこちらを値踏みするかのように語りかけてきた

「だから、魔力の質が低いと味も落ちちまう…
あんたは最高のミルクを造つてくれるみたいで安心したよ」



「それと…魔力の量で母乳を造る量が決まっちゃう…
どんなに味が良くても採れる量が少なくちやなあ…」

再び私の前に空になったジヨツキが置かれた…

「さて…あんたからはどれだけミルクが搾り取れるのか…
今から試してみようじゃねえか」

「っ♡♡」

目の前に置かれた空のジヨツキを見て
搾乳の快感を思い出してしまおう

その瞬間、体が熱を帯びる…
無意識に魔力を使って母乳を造り始めているのだ



「っ…っ…だめっっ♡
このままだとまた胸が苦しくなってしまうっ♡」
自分の意志では母乳を造ることを止めることができなかつた
体は搾乳されることを望んでしまっているのだ…

先程の比ではないくらい胸がパンパンに張ってきてしまう
体を満たしていた快感は消え、苦しさに支配されていく

「っ…っ…この苦しさを消すには…もう一度…
もう一度乳を搾ってもらわないとっ…っ…♡」



無意識だった…
つい縋るような視線を男に向けてしまっていた…

「なんだ…もう一度デカ乳を搾って欲しそうな顔だな？」
男のその言葉にこくりと頷いてしまう…

乳を搾ってもらえる…そう思った瞬間
我慢できないほどの衝動に駆られてしまう
（お願いっ…はやく♡はやく搾って…♡♡）

「へっ…それじゃあなんて言うか…さっき教えたよなあ？」



男の言葉にわずかに残っていた理性が反応する…
言っってしまったばきつと後戻りはできない

だがもう遅かった…
一度搾乳の快楽を知ってしまったのだ…
もう我慢することなどできるはずがない…

「っ♡はっ…♡はっ…♡わっ…私のっ…♡♡♡」

気づいた時には自らを卑下するかのような言葉を
必死になって絞り出そうとしていたのだ…

「私のおっぱいからっ…♡♡
ミルクを…搾り取ってくださいっ…♡♡」
気がついたときにはそんな言葉を口走ってしまっていた…

その言葉を聞き男が何かの合図をする
すると後ろで控えていた男の手下たちが姿を現した
皆一様に目をギラつかせ私のことを見つめてくる…



「今夜は宴だ！
みんな好きなだけ母乳を搾り取ってやれ！」

すぐさま男たちに周りを囲まれてしまう
私はこれから魔力が尽き果てるまで
母乳を搾り続けられてしまおうのだった…

「ひっ♡んおおっ♡♡おおおおおおっ♡♡」

容赦なく男たちは搾乳を繰り返す
乳首から母乳が吹き出すたびに
体は性的絶頂を繰り返すようになっていた

ビク

♡おま♡

ビク
グッ

「イグッ♡イツちゃうっっ♡♡♡♡」

「乳を搾られてイツてやがるぜ
コイツはとんだメス牛だな!」

男たちに次々とおっぱいを搾られ
休むことなく絶頂を繰り返してしまう…

ドロルル♡

ドロルル♡



まはい♡

ゴクゴク

ゴク

「おらっ！
ちやんと教えたとおり
できるようになったか？」

「はっ、おらっ♡♡」

「私の母乳…♡
搾り取ってくれたわらららららら♡♡」

「へっ……まあ合格だ
ほれっご褒美だっ！」

んんんんん♡

ん♡

んんん♡

んんん♡





「アッ!」

「クマ」

「グハッ」

「……」



だ...だ...♡

だ...だ...♡

おあ...おあ...♡

キエ

『まだまだだの!』

おはようございます

おはようございます

おはよう

おはようございます

おはよう



『コイツ薬の効果で母乳が
吹き出すたびにイツてやがるな
射精してるみたいでおもしろえ…』

あゝん♡♡

あゝん♡♡

あゝん♡♡

あゝん♡♡





「替われ！
次は俺がイかせてやる！」



「イェーイ!! イェーイ!! ちまえっ!!」

あーあーあー!!

イェーイ!!

イェーイ!!

イェーイ!!

イェーイ!!

あ...
...

あ...
...

あ...
...

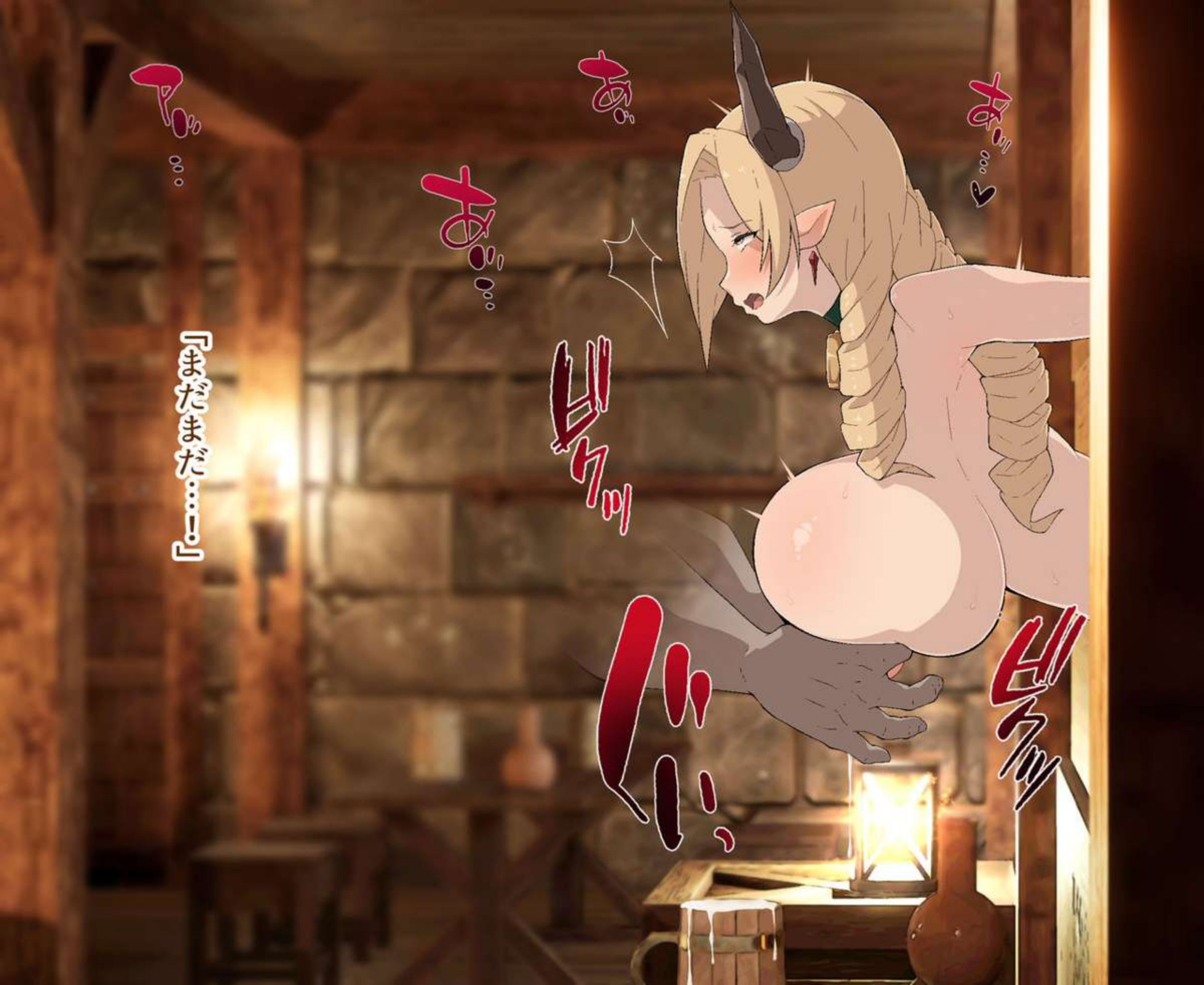
あ...
...

『まだまだ...!』

ヒッ
ヒッ
ヒッ

ヒッ
ヒッ
ヒッ

ヒッ
ヒッ
ヒッ





あま
ぐっ

あま
ぐっ

あま
ぐっ

あま
あま

あま
あま

あま
あま

あま
ぐっ
あま
ぐっ

あま

あま

『おらおら...
あんま乱暴にすると壊れちまうぜ』

はっ...
はっ...
はっ...

ハッ...
ハッ...
ハッ...

ゴク
ゴク
ゴク
ハッ...



「グツッ…俺の番だつてのに
まだミルクはでるんだらうな？」





『オラツツ!でろっ!』

「なんだもう魔力切れか？」

ゴキウ...



『おんおんー。
でるじやねえかー！』



あああああ
あああああ

あああああ
あああああ
あああああ

ア
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン

ア
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン
ク
ン



「ひおっ♡♡おおっ♡♡イグッ♡♡」

「おっぱい搾られてイグッ♡♡
イグウウウツ♡♡」



宴は朝まで開かれたが私の母乳が止まることはなかった
本来ならとつくに魔力切れで母乳はでなくなるようだったが
私のおっぱいから母乳が止まる気配はなかった！

母乳が出続ける限り搾乳を続けなければ体に悪いらしく
宴が終わった後、私のおっぱいとある道具が取り付けられた
本来は乳牛用に使う搾乳機だ

搾乳機は容赦ない吸引で私の乳首から
大量の母乳を吸い上げていく
乳首への強烈な刺激と断続的な搾乳に
意識が朦朧として何も考えられなくなる…

あーっ

ゴッゴッ

あーっ
あーっ

あーっ
あーっ

「あ…あひっ♡むり♡むり♡
おかひくなっ♡ひゃうっ♡♡♡」

ゴッゴッ
ゴッゴッ

「んほおおお♡♡♡♡
おおお♡♡♡♡」

薬の効果が切れるまで私の搾乳は終わらない…

「へっ…スゲー量の母乳だな
まるで本物の牛みたいじゃねえか」

「これなら一人で店のミルク全部賄えそつだ」

「ははっ…違いねえや」

あひっ♡

んざっ♡

インっ!!

ツインっ♡

ぶっ…

インっ♡

ムンゴロネッ♡

朦朧とするなか微かに
男たちの話し声が聞こえてきた

「そっついでこのメス牛の出荷先は
決まっているらしいな…」

「なんでも羅馬帝国の酒場に
出荷される見てえだ…」

「っ♡」

その言葉を聞いた時、一瞬だけ我を取り戻した…
だが…もうどうでもよかつた…

おっ♡



国も使命も…この快樂の前では
全てがどうでもよかつた♡
ミルクタンクとして扱われている間だけ
何もかも忘れられるのだ♡

機械的に乳を搾り取られる快樂に身を任せるように
私の意識はどこか遠くへと落ちていく…♡